

唯吾知足止（タダワレタルヲ
シル）

koberyo1

この言葉を知ったのは、今から遡ること二十数年以上のむかしである。

思い起こせば、K税務会計事務所の玄関の前に置かれていた。円形の石を彫った「つくばい」である。そこにあったのは京都の竜安寺に水戸光圀が寄進したといわれるものをコピーしたものだだった。

また、蹲踞（つくばい）とは、茶室に入る前に手を清めるために用いられる手水鉢のことである。わたしはそれで手を洗ったことはないが、中央の四角い口には水がたたえメダカが泳いでいたのを思い出す。

そこに彫られていた文字が、「唯吾知足（タダワレタルヲシル）」だった。

当時、わたしはこの意味がわからず、事務所に出入りするときに毎回、チョット見るだけであった。

足るを知る、ということだが、それを言うと、すぐに物質だけの意味にとらわれがちだが、「心の思い」にも通用するのではないだろうか。現状に謙虚に満足し、有難いと思うことであり、その思いは“豊かさ”につうじると思う。

また、物質的欲望には限りなし、とよく言うが、これで十分という自分のモノサシで自分自身を知っていれば、アレコレと不満を口にすることはなくなると思う。欲望を満足させるために、よく考えると便利になりすぎ、科学技術文明は発達してきたわけで、その底辺にあるのは、別の見方で考えれば、なるたけ楽をしていい目をみようじゃないか、という怠け心である。

やはり人間一人ひとりが自己改善してゆく風土が重要かと思う。自惚れが強く、「俺が俺が」という態度では世界に遅れをとる。

いまわたしたちは満ち足りた生活をしている。だが、便利すぎる生活は何かをなくしてしまったのではないかと危惧するときもある。

暖房は炭火にして、トイレは汲み取りにしたら人間性はもしかしたら改善されるのではないかと、とも思ったりする。「足ることを知る」という考えによって、現在の高度な生活レベルを下げる実践が意外に人々の生活を豊かなものに変えるかもしれない。よく考えれば、戦時中は一億人の国民がそれをしていたわけで、「足ることを知る」生活をすれば、日本の資金繰りはすぐさま改善されるだろう。

日本のモノづくりや技術は海外に売って、国内では節約のスローガンを掲げることは、けっして不可能ではない。

なお、わたしたちは共生を考えるべきで、とかく人の世話にならないとか、人には迷

惑をかけないとか言ってはいるが、人間の生活においては絶対にそんなことはできるはずがないのだ。

ひとつぶの米でも、一滴の水でも、人の手をへて入手が可能になるわけで、お金をだせば入手できるという問題以前に、もっともっと一人では生きていけないという教育を知らしめるべきではないか。それがわたしの持論である。

参考図書、「足るを知るころ」松原泰道著、プレジデント社